

常滑市民俗資料館

友の会だより

第10号



伎芸天女像 明治39年（1906年）平野霞装作（詳細本文3頁ご参照）

平成3年9月発行(1991)

アップツーデイト（現代的）な資料館に

常滑市民俗資料館長 水上 健



桜花咲き匂う4月、民俗資料館長に任ぜられ着任しました。資料館の辺りは私にとって「うさぎ追ひし彼の山、小鮒釣りし彼の川……」と歌ったり小学唱歌そのもの、夏はとんぼや蝉をとったり、

鯉や鮒を釣り、秋はハツタケ（きのこ）をとり来た思い出の里山であり、現在も緑に囲まれ小鳥の囀りの絶えない素晴らしい環境です。

昭和26年、私が大学に入学した頃「常滑古窯調査会」が作られ、頼まれて夏休み中常滑近辺の山野を自転車で駆け巡り、古窯跡の調査の手伝いをしたのが私の「古常滑」との出会いでした。その後「登窯」（陶栄窯）「とち窯」も実測し図面にしたことも思い出されます。その後多くの方々の協力で資料収集と整理が進められ昭和56年に民俗資料館が開館されました。それから5年後の昭和61年、民俗資料館友の会が錚々たるメンバーにより発足、活動を開始されました。以来5年間、研究心に富み、多方面に亘って地道な活動を続けられ、その足跡は「友の会便り」各号に記されているように立派なものでありま

す。6月に催された「友の会5周年記念・初代山田陶山展」には、片山会長さん始め役員の方々が毎日会場に詰められて、受付や展示説明に当たられた結果、図録の売上げも予想をはるかに越えるものでした。隣接の陶芸研究所の「初代山田常山展」とタイアップしたこともあり、内容の充実した展覧会でした。半田や西三河、名古屋方面から、又遠くは関東、関西からも見学に来られ、特筆すべきは、平素少ない常滑市民の方々が朝から見学に来られ、会期中の見学者は5500余名にも及び、大成功でした。これは民俗資料館が、地域の博物館として機能していることの表われであると嬉しく思いました。

民俗資料館は民俗資料を始め各種文化財を積極的に保護・活用するための「文化財センター」として機能させるとともに、博物館としての機能をもった社会教育施設であり、学校教育における郷土学習の場でもあります。今年が開館十周年に当たります。社会の進歩に遅れることなく、将来のため、アップツーデイトな設備の充実と運営を図りたいと考えています。そして陶芸研究所、県窯業技術センター、陶磁器会館など関係諸団体と提携を強め、地域産業の振興にも寄与しなければならないと考えています。

民俗資料館の開館10周年によせて

友の会会長 片山 忠 義

常滑市民俗資料館が、この程開館10周年を迎えましたことを、心からお喜び申し上げます。

開館以来、国の重要有形民俗文化財に指定された1655点の他、数千点の貴重な資料を所蔵保管し、その一部を常設展示して来観者に深い感銘を与えて来ました。

5年前当友の会が発足し、以来毎年資料館と共催で“シリーズ我が家の歴史展”を開催するなど、資料館業務の一端に微力を尽くして来ましたが、この記念の年を迎え、更に一層の努力を続けたいと思っております。

恩師平野六郎（号霞裳）を教え導いた人々とその周辺

山田陶山 講述 渡邊榮造 筆録



平野先生

平野六郎（霞裳）は、明治6年（1873年）4月、北条村の名家七代目平野七兵衛様の四男として生まれました。父は号を不苦斎と称し、書画、骨とうを愛好し、茶道・華道に通じた文化人でした。母は加久といひ、成岩村の大庄屋松本伊兵衛の長女であります。

霞裳は明治17年（1884）、常滑美術研究所に入り、東京から招聘されて来ていた内藤陽三から幾何画法及びデッサンを学び、内藤の後任となった寺内信一から模型法や美術彫刻の技法を学びました。

明治21年（1888年）から号を霞裳と稱して、置物類や輸出陶器の見本や原型の制作に当り、のち常滑工業補習学校（のち常滑陶器学校—現常滑高校窯業科）の教員となり、東京高等工業学校撰科（現東京工業大学）を修了して、常滑陶器学校校長兼教諭となり、多くの後進を育成しました。

さて、霞裳に幾何画法やデッサンを教えた内藤陽三（号鶴嶺）は、旗本武士の出身で、彼が9歳のとき幕府が倒壊した為に、幕臣は静岡へ隠棲したようで、彼の号は静岡の鶴峯という地名からとったのだと、彼は生前に友人の寺内に語っていたそうであります。

やがて、常滑美術研究所への県費補助が打ち切りになるに及び、彼は常滑を去ることになりますが、その後、政府のドイツ留学生となり、ベルリンで7か年間に亘って彫刻及び建築の技術

を習得しました。しかし、彼は元来ひ弱な体質でしたので、肺結核に冒され医師の勧めで帰国療養することになり、その途上明治22年（1889年）5月13日、南支那海上に於て30歳の若さでこの世を去ります。また霞裳に模型法や美術彫刻を教えた寺内信一は、山口県出身で、彼も常滑美術研究所の廃止に伴い、間もなく瀬戸陶器学校教諭となり、次いで佐賀県有田の工業学校教諭から、遠く中国湖南省長沙の工業学校までも赴任して教鞭を執り、帰国して愛媛県砥部工業学校校長兼教諭を最後に退官、有田で晩年を送りました。彼は工部美術学校在学中、学費に窮し中退を決意したところを彫刻科教師のラギーザが彼の才能を惜しみ、校長に懇請して同家の学僕に世話してくれたお陰で、卒業できたという異色の人物であります。

この彫刻科教師ヴィンツェンツォ、ラギーザは、イタリアのシチリア島パレルモ市郊外の生まれで、イタリア政府の推薦で明治9年（1876年）来日、明治15年（1882年）8月、パレルモ美術工芸学校長に就任、離日するまで7年間、工部技術学校で教鞭を執った彫刻の大家で、人間的にも大変勝れた人物だったと思われます。なお、帰国後制作した国王エマヌエルロ二世騎馬像は、彼の代表作といわれております。

ラギーザの懇請を受けて、寺内信一を自宅におき、学僕として勉学を続けさせた工部大学校長兼付属美術学校校長の大鳥圭介は、兵庫県赤穂の医師の家に生まれ、長じて江川英竜に兵学を学んだ偉才で、維新の際には幕府の歩兵頭として榎本武揚と共に五稜郭に立て籠って官軍に抗戦し、のち降伏し許されてこの要職に就いたの

ですが、ずっと後、日清戦争の際には外交工作にも画策した人物でもあります。

さて、震裳の代表的作品に常滑火葬場の玄關前に建つ伎芸天女の像があります（表紙参照）。この陶像は明治39年（1906年）3月から75日間に亘り、愛知県博物館で開催の日露戦争凱旋記念博覧会に出展し、見事褒賞を受賞した作品であります。陶像の身の丈が6尺8寸（約2m）もある大作と聞いて、審査委員長の福井江亭（愛

知県技師、のち東京美術学校教授）は当時愛知県工業学校教諭でもあり、震裳と親交のあった心易さもあって、わざわざ常滑まで制作現場を視察に来て、完成前ながらその素晴らしい出来栄に感嘆したといわれております。以上、天性の資質を備えた震裳を扶け導いた人々と、その背景の人間像についての一端を披瀝して拙稿を終ります。（文中敬稱略）

現存する明治の常滑タイル

柿 田 富 造

昨年度の常滑市のタイル生産額は約488億円で全陶磁器の53%に相当し、市の主要生産品になっているが、明治時代は土管の生産が中心でタイルの生産はわずかであったので、その史実も少なく記録もあまり残されていない。

ところで、(株)INAXでは、ここ数年来タイル工業史について調査を進めてきた。そこで、その中より構築物の一部として現存している明治時代の常滑に関連したタイル類について、不十分ながら数例紹介することにする。

1. 鯉江家陶製墓碑の陶板



明治18年瀬木墓地内に鯉江方寿が建立した鯉江家の墓碑は、その台座わくに4枚の板とそれを支える4本の円柱が飾られている。これらもともと花壇用として製造されたものであったが、陶板ということで一応タイルの範疇に入れ

ることにする。

この陶板は中国風の浮彫り唐草文様で上端には切透し文がある。また円柱はその柱頭に繡玉を弄ぶ獅子の彫刻がのっているもので、いずれも銅青磁釉であり格調の高いものである。

常滑には明治7年頃から政府より博覧会への出品を促す布告がきたり、起立工商会社などの貿易商からは輸出品の製作勸奨があったりして、鯉江高司は明治14年に博覧会へ花壇を出品した記録がある。しかし、ここに使われた陶板・円柱は、それより後の明治16年に常滑へ赴任してきた内藤陽三・寺内信一によって作られたものとの見方が強い。両者とも東京の工部美術学校の出身で、常滑美術研究所の教師をしているが、この研究所は高司の金島山窯の一工場を教室として発足したものである。

明治10年代に、東京で最先端をゆく意匠や技法が、いち早く常滑にも導入されたあかしとして、この墓碑は誠に意義深いモニュメントであるといえよう。現在この陶板と同じものが、常滑市民俗資料館にも8枚保管されている。

2. 日本銀行本店地下室の施釉白煉瓦

明治29年に竣工した東京の日本銀行本店は石造建築ではあるが、その地下室の内壁には施釉

白煉瓦が使われている。この白煉瓦は、名古屋の愛知煉石(株)と、常滑に本社をもつ陶弘社が受注し、明治24年の地下室完成時に698,000個納めているが、陶弘社はこの白煉瓦を常滑ではなくて、三河の刈谷で製造した。

この陶弘社は明治12年、土管の乱売競争を避けるために設立された商社であって、初代社長には鯉江高司が就任した。ところが経営は諸問題をはらみ内紛もあったりして、同社は伊藤清吉個人のものとなり、高司は新たに常産商會を創設して常滑の窯元の協力のもとに再発足する。そのために陶弘社は窯元からの仕入れが閉ざされたので、三河高浜に神谷源之助の協力を得、それ以後三河でも土管ができるようになって、常滑と競争することになるのである。

この施釉白煉瓦は煉瓦であってタイルとはいえないが、外装タイルのルーツは壁用化粧煉瓦でもあるし、常滑の会社が当時日本最大の建築物に関与したことは実にすばらしいことなので、敢えて紹介することにした。

3. 名和昆虫研究所記念昆虫館の外装タイル

明治40年に竣工した岐阜公園内の記念昆虫館は赤い切妻屋根に小窓を配した木造煉瓦壁の欧風建築で、切妻部分を除いた壁面は、上から下まですべて外装タイルが張られており、現存する欧風総タイル張り建築では日本最古のものと思われる。設計は欧州で研鑽を積んだ新進建築家の武田五一、外装タイルの製造は西阿野の久田吉之助である。

この外装タイルは小口平にしてはやゝ大きめの無釉湿式淡黄色タイルで、焼けは素焼程度で吸水率が大きく、壁面下部は凍害による剥離も認められるが、当時としては画期的なものであった。

久田吉之助は武田五一の指導のもとに、ひき続き京都府記念図書館(明治42年竣工)、京都商品陳列所(明治43年竣工)にもテラコッタを納



名和昆虫研究所記念昆虫館

めている。また彼は明治37年タイル関係では日本最初の「被覆煉瓦」の特許を取得しているし、帝国ホテルのスクラッチ煉瓦製造にも関係し、大正6年頃設計者の米人フランク・ロイド・ライトを知多半島に案内している。かように、彼は日本の外装タイルの開拓者として、明治・大正期にわたって活躍している。

4. 真福寺の本堂前煉瓦

寺院の本堂前は一般に石畳が多いが、保示町の真福寺には常滑焼の210mm角の煉瓦が四半角に200枚以上敷かれている。この煉瓦は湿式型起しによる無釉陶器で、現代のクリンカータイルに通じるものがあるが、表面には浮彫りのすばらしい唐草模様が施されている。

この本堂は文政4年(1821)に建立されたが、本堂前参道を工事した時期はよくわからない。ただ石工の堀川傅右衛門が施工したことは確かであり、彼は明治7年に死没しているため、それより以前であることには間違いない。

これと同じ煉瓦は市場町の山下成一宅の前庭にも敷かれていることから、当時の山下豊蔵の製造だと判断した。彼は真福寺の有力な檀家であり、明治29年有志と共に武豊町に尾張土管(株)を設立し、土管製造の機械化を他に先がけて行っている。また明治40年頃、五二会の前田正名が常滑へ来て英国製の床タイルの見本を提示してから、彼は早速その試作研究にとりかかっているが、この寺の煉瓦はあるいはその当時のもの

かも知れないと推測している。

参考文献 日本のタイル工業史 (株)I N A X (1991)
鯉江方寿の生涯 吉田 弘
(1987)

写真提供 (株)I N A X

備 考 文中の登場人物はすべて敬称を略す。



真福寺の本堂前敷瓦

古 都 に 求 め て 衣 川 俊 平

平成2年、今年も色々なニュースが飛び交いましたが、微笑ましいニュースでは「秋篠宮紀子さまのスマイルとファッションブーム」でした。ご皇室の官家には秩父宮、三笠宮、高円宮など私達にお馴染みで、且つご由緒ある呼称を冠していると学んできましたが、新設の「秋篠宮」とはご皇室とどのような関係にあるのか、私の興味の一つになっていました。

そんな或日の事、友の会の竹内金二さんとの会話の中で、奈良市の近くに秋篠寺と言うお寺があり、一見を勧められました。地図を調べるうち奈良市の西約15kmの地点に秋篠町の地名在り卍印見ゆ、我が身に旅ごころ燃ゆ。

思い立ったら其の日が吉日、ガソリン満タン、ブレーキ調節OK、安全運転一人旅の開始。10月3日午前11時JR奈良駅着、観光案内窓口の可愛い子ちゃんに予備知識を受ける。

秋篠寺は奈良時代末期の(766年)光仁天皇の

勅願により建立、境内は古木蒼然として往時を偲ぶ、本堂を始めとして各種仏像に国宝多し。十二神将を始め、日光・月光菩薩、薬師如来さま等々有り難き哉。自然に合掌。特に日本全国でこの秋篠寺にしか祭る事を許されていない明王即ち正式には「別尊大元師明王」。日本全国神社仏閣ごまんと有るも、祭る事も設置する事も許されず、宮中に於いてのみ、国家鎮護のご本尊としてご修法なされるとか。説明を拝聴した。

「新しい宮家のご称号が秋篠の宮」、詳しくは知る由もないが、些さかの由来が理解できました。神社仏閣巡りは人の心をなごませてくれる。でも私は凡人、昼食はグルメを求めて右往左往、午後1時30分秋篠寺拝観と共に奈良に来たもう一つの目的、新薬師寺に到着。

「新薬師寺の新」とは「あたらしい」では無く、「あらたかな」を意味するものと、最初からの説明に納得。この寺は天平19年(747年)光明皇后勅願によって建立。当時東大寺とならび四町四方の境内に伽藍多く、一千人以上の修行僧侶ありしとか。古文書に基ずく説明あり、約1250年前に建立の本堂(国宝)は現在もその儘に残り、我国最古最大の建築物と感激する。ご本尊は薬師如来坐像であり、他に十二神将が祀られているが、詳細は省いて、ここでは特に興味の有る「おたま地藏尊」について記す。

昭和59年10月、本堂安置の景清地藏を解体修



大元師明王像

理中にその胎内から発見された尊像である。勿論裸形であり、男性のシンボルも隆として、羨ましき哉。鎌倉時代の作品で等身大の地藏尊「世紀の発見」として世に注目され、いま此処に私の目前に立つ。私の拙文では表現の出来ない感動と冷徹に血の凍る思い。時の刻みを忘る。

午後4時近し。帰路は夜間、老体危険多し。再びJ R駅の可愛い子ちゃんを訪ね、宿屋の手配。幸い今日は中秋の名月で、年に一度の采女祭り。猿沢の池に船を浮かべて古式床しく古楽器も奏でながら、猿沢の池に身を投げた哀れな采女を慰めるお祭り聞き、池の付近の安宿のしかし最高の部屋をリザーブ。散財止むなしと決心。

泊まると心を決めれば、日は未だ高し。宿入り前の時間を有効に欲張り、唐招提寺と、斑鳩の柿に引かれて、法隆寺に参拝すべく運転開始。開祖鑑真和尚をお祀りする唐招提寺は、何時幾度きても飽きる事をしらない。殊に、この金堂は、天平金堂唯一の遺構として世に君臨し今、あたかもギリシャの神殿を想起さす和上の寿像(国宝)は一年に三日間しか開扉されないとの事。安置されている御影堂の前に膝まづいてのお参りで、次の法隆寺に向かう。

法隆寺界限は、唐招提寺付近と異なり車の駐車は自由で無料。但し参詣の時間的制約も在り、五重の塔内の、四面の須弥山に掛かる弥勒菩薩説法の図、文殊維摩の問答図、釈尊涅槃の図、仏舎利供養の図などを拝観し、時間の短さを嘆きながら、再度礼拝の機会を願い祈り、去る。

さすが安宿、中学校の修学旅行生徒の宿舎。部屋は、生徒引率の校長先生の泊まる部屋とか。

部屋よし、膳よし、お酒また良しでほろ酔い、広辞苑によると「采女」とは帝の妃(後宮)に仕え一定の地位を持つ女官とある。愚考するに、素性よく、美形で色白、教養あって文化を嗜む、そんな佳人を皇帝が袖ひかぬ訳なし。二人の関係がバレて後宮嫉妬、帝との愛も薄れやがて思い悩んで中秋の名月の日に猿沢の池に身を投げる。町人これを哀れみ毎年中秋の名月の日に彼女を慰めるべく、祭りを催す。

宿の女将に案内され、神主の説明を聞く哀れ、もの悲しい笛や太鼓の音を背に宿に帰って寝酒を頂き、明日の天気を気にしつつ就寝。



雲中供養菩薩像(国宝宇治平等院)

明けて10月4日曇天、帰路は宇治の平等院に立ち寄り、阿弥陀如来を拝み、池を隔てて国宝の鳳凰堂を眺め拝し、午後4時、400kmの一人旅を無事に終えた。愛車スタリオンに感謝。

(このレポートは、昨年(平成二年)の12月に書いたものです。従って、文中の「今年又は本年」との表現は「去年とか昨年」と云うふうにて、「読み換えて」理解して下さい。編集担当)

広目の毘沙門天

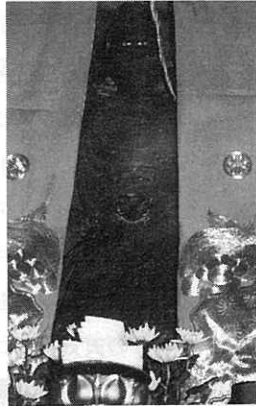
桑原道雄

かねてから一度拝観したいと思っていた、広目寺にある毘沙門天を、大祭の日にお開帳する

というので行ってみた。毘沙門天の像容は多聞天と同じである。通則として四天王が揃って

るときは多聞天、独尊の場合は毘沙門天とよばれる。片手に塔をのせ、も一方の手に鉾をとるのが普通の形態で吉祥天、善膩童子を脇侍とすることもある。

広目の
毘沙門天



四天王とは仏土守護の神将である。東は持国天、西は広目天、南は増長天、北は多聞天が配置されている。甲冑を身につけ、武器をとり、足下に邪鬼を踏み姿につくられている。この像が日本で最初につくられたのは遅くとも奈良後期の時代であることが西大寺資財帳によって推察されるという。四天王は仏教の成立以前からインドで根強く信仰されていた神で、バラモン教やヒンドゥ教、あるいは民間信仰の神をして仏教にとり入れられたものである。

広目寺縁起によると、今日の字名が示すようにに西之坊はじめ伽藍坊舎があったとあるが、大坊を守護する毘沙門天であったとも考えられる。しかし毘沙門天信仰は歴史が下ると、武神としての性格から、福神としての信仰、福德とか富貴の神としての信仰によって大衆化されたものと思う。又吉祥天は毘沙門天の妃とされている。

江戸時代になると、七福神の神々につらなり庶民に親しまれるようになった。いわば福神の代表を選んで、繁栄、長寿、財宝などあらゆる現世利益を祈願する為に選ばれた神々の一つである。

広目寺の毘沙門天は本堂でなく別棟にある。

以前安置されてあった所から、天井の高い方へバックした所に、一段と高く、見上げるような位置にある。開扉された厨子には、祝祭の為の幕が両枠にたれさがり、像をかくしているので一部しか拝観できない。武具をまとい火焰光背もかすかにみえたので毘沙門天である。暗くてたしかめかねるが、眼光するどく憤怒の面相である。邪鬼はさっぱりみられなかったが、全体にススで黒ずんでおり、厨子の大きさの割には像が大きくみえた。住職の説明では材質はクスノキであるというが飛鳥仏しかみられない材だけに、やはりヒノキの寄木造りのように思える。常滑市誌によると、火災による損傷で、背面と裾が後補である。補修ヶ所もあちこちあるが当初はまとまりのよい作であったとある。慶長5年九鬼水軍による兵火にあい、灰燼に帰し、その後135年、將軍徳川吉宗の時世、元文4年、大谷の瑞雲寺を移して再建して今日にあるという。かつてこの村にあって、7坊を有していた大坊の名から広目寺という由来がある。

厨子の横には、三まわりも小さくした彩色の図形の毘沙門天、脇侍の吉祥天、善膩童子が安置されていたのが印象的であった。



厨子のわきにある彩色毘沙門天



塩田遺跡と唐崎遺跡について

服 部 救

昭和60年の春、西浦北小学校の子どもたちが、「海岸で、角のような変な物を拾った」と言って一本の角形土器を持ってきた。

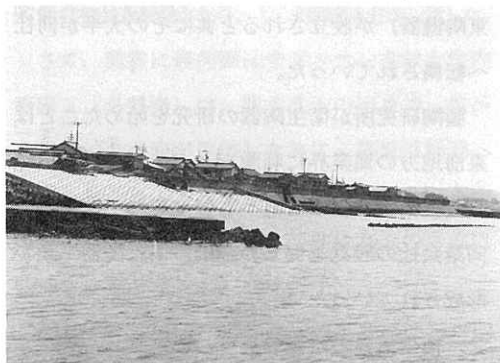
当時、私は製塩土器の知識は全くなかったのだが、

「これはすごく古い大事な土器だ。また探しておいで」

と言って受け取った。その後、また子どもたちからいくつかの土器が届いた。

ここから、私と子どもたちとの海岸探訪が始まった。子どもたちが拾ったいくつかの土器を民俗資料館へ持たせて、中野さんに鑑定していただいた。中野さんはここを「塩田遺跡」と命名し、これらの遺物を西浦北小学校郷土クラブ採集として、民俗資料館に展示してくださった。

これらの遺物は、樽水海岸から阿野海岸にかけての波打ち際で採取した。この海岸線はヘドロが多く、大潮で干潟ができてもヘドロに膝までもぐりこむので干潟での遺物採取はほとんどできず、汀線に落ちていたものばかりである。(後日、礫の瀬で製塩土器を採取している)

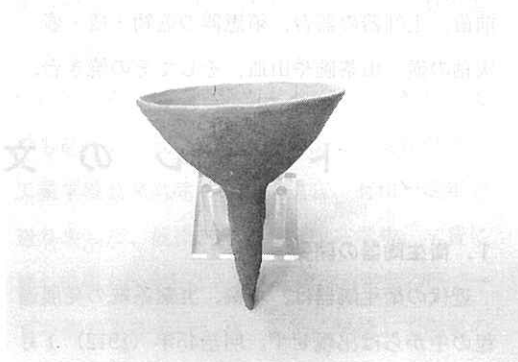


塩田から唐崎を望む

拾った遺物は、製塩土器、土師器、須恵器、山茶碗、山皿等の破片であり、なかには山茶碗

の重なったものもあった。

その頃、忠田の池からの排水路が作られ、その出口を掘り返したり、防波堤改修工事のために海岸を堀削したりしており、付近を探したが掘り返した深部からの土砂の中には遺物はみつからなかった。



製塩土器復元品 (高さ約16cm)

昭和63年春の大潮の時、唐崎海岸へ潮干狩りに行った一人の子どもが、

「先生へ、宝物のおみやげ」と言って、菓子折りの箱一杯の角形土器を届けてきた。これをきっかけに、唐崎での採取を行わない、かなりの量の遺物を集めることができた。

ここを「唐崎遺跡」と名付けた。

唐崎遺跡は、唐崎川の南側からジャニス工業にかけての堤防の外側で、基盤から約50%の堆積層がある。大潮で一番潮の引くときは約150%の干潟ができ、さらに100%ほどは水深50~60%の浅瀬となっている。ここはアサリや釣餌のゴカイを掘るために絶えず掘り返されており、その掘り返された土の上にたくさんの製塩土器が散らばっていた。

昭和63年夏、唐崎川が浚渫され、そのヘドロを唐崎川のすぐ南に捨てる予定であったが、阿

野区長さんのご理解とお骨折りで、少し遠いジャンス工業の西側に捨ててもらふことが出来た。しかし、潮流のためにヘドロが広がって、残念ながら唐崎遺跡はヘドロの下になってしまった。唐崎遺跡で採取した遺物は、製塩土器が圧倒的に多い。しかし、東海市の松崎遺跡のようにカマスで何杯というのと比べるとほんの僅かである。だが、五世紀頃のちくわ形のものから、指跡のついた太いもの、細長いものから細くて短いものへと、各時代に及んでいる。また、鹿の前歯、土師器の器台、須恵器の蓋物・瓶・壺、灰釉の壺、山茶碗や山皿、そしてその焼き台、

さらに江戸時代の瓶など、古代から現代まで各時代のものを網羅している。

これらの採取の意義は、

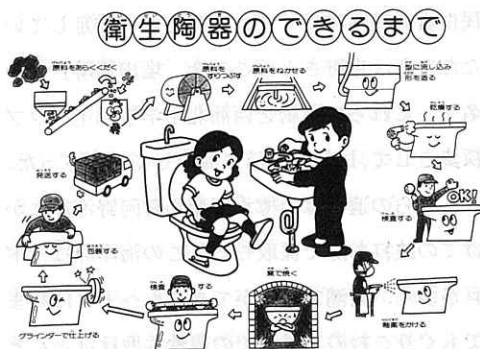
- 1、常滑市西の口から美浜町上野間若松まで空白になっていた海岸線に製塩遺跡を発見したこと。
- 2、その遺跡が、古代から現代まで連続していること。
- 3、小学生の子どもたちに、遺物採取を通して歴史への関心を持たせ、遺跡保護の大切さを教えたことである。

簡単ですが、塩田遺跡と唐崎遺跡の概要を報告させて頂きました。

トイレの文化 (3) 竹内金二

1. 衛生陶器の開発

近代の衛生陶器は、本業、丸窯系統の発展過程の中からは出現せず。明治45年(1912)1月に明治から大正にかけて海外の製陶技術をわが国に導入して、ディナーセット、高压硝子等の新分野を開拓すると共にタイル及陶管の品質改良に尽力した近代陶業の先覚者である。大倉孫兵衛、和親父子によって着手された。大倉父子は私財を投じて日本陶器合資会社の構内に製陶研究所を設立して主として衛生陶器の製造研究を開始した。この研究所では17,280余種類にのぼる素地、釉薬の組合せについて試験を重ねたともいわれている。また流し込み成形についても、なに分にも未開の分野であり種々困難な問題に直面し失敗の連続であったが、苦勞の末、素地とうわぐすりの調合、石膏型への流し込み成形及石膏型の製造方法が研究所によって完成され、始めてわが国の衛生陶器の生産技術が確立された。そして大正3年8月に洗面器、水洗式小便器及大便器を大阪市場へ供給した。これが国産による最初の衛生陶器といわれている。



やがて大倉製陶研究所の衛生陶器の生産技術者は、大正6年九州小倉に東洋陶器株式会社(現東陶機器)が設立されると共にその大半が同社へ転属されていった。

製陶研究所が衛生陶器の研究を始めたことは東海地方の窯業界に刺激を与えて、同所を退職した技術者によって他へも伝えられて、やがて同業会社の設立を促しわが国の衛生陶器工業が形成されていった。

2. 衛生器具の附属金具

明治16年頃英国人が横浜にわが国初めての洋式上水道を設計した。それに洋風建築の当初のものに英国風が取り入れられた関係から、大正

末期までにわが国で使用された衛生器具のほとんどは英国風で、鉛管接続に適した形式であった。その後米国製品が輸入されるようになり、種々の事情から米国製品が英国型を凌駕し、今日のわが国に於ける衛生器具及附属金具のほとんどはこの米国型の流れをくむものであるといっても過言ではない。英国式と米国式の主な相違点は、米国式では工事中用材にネチ立管を使用する関係で、衛生器具のほとんどがネチ接合に適するようになっていたのに対し、英国式は半田蟻接合に便利するように作られていたことが大きな違いである。わが国で用いられた附属金具は、当初は陶器と組合せで輸入されたが、その後輸入品を模倣したものが国内で製作されるようになった。

大正12年の関東大震災は、将来の輸入困難の見通しと、衛生工業の独立を期するためには外国製品に劣らぬような附属金具を国産せねばならないという機運になり、一方、衛生陶器製造関係でも期せずして優秀な高級衛生陶器の生産に着手したので、衛生器具工業は短期間で躍進し、昭和年間には衛生器具の輸入は特殊な器具を除き全く杜絶した。

初期の衛生工事の大半は家庭用の給水を主体として極めて単純なものであったが、生活の向

上、社会機構の複雑化に伴い建物の内容も逐次変化して、今日のような衛生設備が生まれたのである。

最初は家屋内の設備が単純であったので、これに対する給水は水道幹管より、枝管を取り出し、それに給水栓を取り付けるのが普通であったが、家屋内設備の複雑化や、高層建築の出現につれて、水道直結給水のみでは不都合が生じ、家屋内給水は水道水または井戸水を一旦私設の水槽に取り入れて、それより屋内各所に配水することが、規模の大きい建物の給水方法となった。

3. 水洗便所の起源

わが国の水洗便所の起源は何年頃であったのであろうか……。明確な資料がないので確定はできないが、明治初期から中期にかけて横浜、神戸に来航した外国人住宅の便所は、その都度始末する方法が取られていた。外部に面した一角を間仕切り、腰かけの高さに板を張ってその上板の中央部に丸い穴を明け、便所の外部から便瓶を差込んだ。用便の都度防臭剤を撒布し、汚物は毎日夜間人夫が来て処理する方法がとられていた。また腰掛式水洗便器が輸入され始めたのが明治中期であることから考えると、わが国で水洗便所が使用されるようになったのは明治中期頃と推定される。

春の伊勢路を訪ねて

肥田花子

朝まで残っていた雨に洗われて新緑滴るばかりの5月9日、民俗資料館友の会春の見学会は、水上館長並びに、片山会長以下約60名、三重県鈴鹿郡関町に、関宿、地藏院などを訪れた。2班に分かれ、お願いしてあった案内の方に従って街並を歩きながら説明をして頂く。ここ関宿は鈴鹿山麓あらかにあり、古代は、越前の愛発、美濃の不破と共に3関と言われた。大名の参勤交代、



関の町並を見学する会員

庶民の伊勢信仰の交通の拠点として栄え、今も東西(1.8k)の間を国の重要伝統的建造物保存地区に指定され、町ぐるみで保存に努めている。狭い道路に沿う古い家並は、往時の殷賑さを彷彿とさせ訪れる人の目を楽しませて呉れる。

古き良き家並残せる関のまち

塗籠の壁虫籠とふ窓 水野美代子

天保年間の記録に、道筋15町3間、家数は旅籠42、酒食店95とあり、細い連子格子、連子窓、腰を踞めて入る潜り戸、旅の若衆が財布をはたいて遊んだ遊廊の名残りの店、大名宿泊の陣屋跡の建物、土産物店は今も素朴な菓子を並べ客に対応する伊勢訛もやさしい。書状箱と書かれたポストのある郵便局は白壁造り、道標や狛犬の魔除けの屋根も懐かしく、桶屋や鍛冶屋の手作り作業も珍しい。

赤あかと焼けたる鉄を打つさまに

足をとどむる関の鍛冶屋に 大沢よし子

次に資料館をのぞく、抽出しを裏側に設らえた階段を上ると、贅を尽くした道具類が紋も鮮やかに、上流社会の人々の暮らしを物語る。

次の瑞光寺の庭には、家康が賞味したと言う権現柿が、つややかな若葉を茂らせていた。

孝子の仇討できこえる関の小万の墓や碑のある福蔵寺は手入れの届いた庭が奥床しくこの寺は、織田信長の三男信孝の菩提寺とあり、恐らくはこの辺りの領主であったのかも？因みに信孝は、野間の安養寺で自刃させられ、恨みの辞世の歌は今もそこに残り、大坊の庭に苔むした墓が義朝の木太刀の塚の奥にひっそりと在る。

地藏院に着いたのは昼頃。若い庵主の案内で



石山観音の石仏

説明をきく。天平13年(741)行基創建と伝えられ、わが国最古の地藏菩薩の座像とか、その顔のやさしいこと。「関の地藏に振袖着せて奈良の大仏むこにとる」と馬子唄にはやされた。本堂南側の愛染堂は室町初期の建立で国の重文。本尊の愛染明王も県下最古とされている。この後、山帰来(さるとりいばら)の葉でくるんだ風味のよい菓子で載いた一服の茶はまさに甘露。

いばら餅に一服の茶を載きぬ

鈴鹿の関の地藏様にきて よし子

昼を少し遅く着いた関ロジで美味しい食事を頂く。ゆったりした和室で疲れをほぐしながら・・・最後の行程の石山観音は標高40m程の丘の砂岩に磨崖仏が、大は3.5m 小は1m位、古くは鎌倉期より江戸期までさまざまな姿に刻まれ、道なき道の険しさを辿り行くのも難行? それだけに御利益があるかも知れぬ。

銭苔の半ば覆へる磨崖仏

うなじ傾けて笑みのこぼるる 美代子

今回もまた中味の濃い楽しい旅行でした。

民俗資料館長更迭 去る4月、前館長長谷川 進氏が常滑市文化会館の館長に栄転されました。在任中のご支援に深く感謝いたします。後任は元常滑陶芸研究所長の水上 健氏が着任されました。今後とも益々のご活躍と、併せて一層のご支援ご協力をお願い申し上げます。

第10号、平成3年(1991)9月25日発行、発行所 常滑市民俗資料館友の会、常滑市瀬木町4-203
電話(0569)34-5290 有線54-429 編集担当者 渡邊 榮造 印刷 株式会社 興起社